

## 2021 バレーボールミーティング報告

日本バレーボール学会 2021 バレーボールミーティング

# アナリストからみた オリンピック出場国の戦術

2021.8.14 SAT | 19:00-20:30 ●LIVE  
 学会員 ¥500 | 非会員 ¥1,000 | 学生 無料

パネラー 宮脇裕史  
元全日本アナリスト  
KUROBE アクアフェアリーズ  
コーチ兼アナリスト

パネラー 石丸出穂  
元全日本アナリスト  
JVA 情報戦略ユニット  
仙台大学

総合司会 縄田亮太  
JSVR 企画委員  
愛知教育大学

ナビゲーター 根本研  
JSVR 企画委員  
ユニバ女子監督  
日本体育大学

ナビゲーター 濱田幸二  
JSVR 企画委員長  
鹿屋体育大学

期日：2021年8月14日（土）19：00～20：30

会場：Zoom ウェビナー（オンライン）

テーマ：アナリストからみたオリンピック出場国の戦術

総合司会：縄田亮太 氏（愛知教育大学）

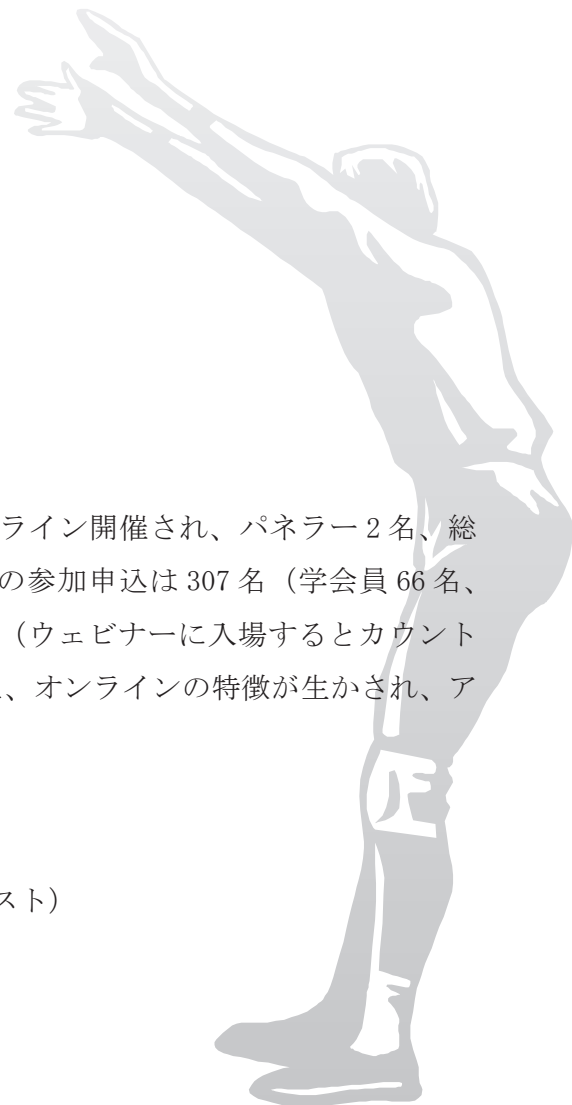
ナビゲーター：根本研 氏（日本体育大学）

ナビゲーター：濱田幸二 氏（鹿屋体育大学）

2021 バレーボールミーティングが8月14（土）に、初めてオンライン開催され、パネラー2名、総合司会1名、ナビゲーター2名の計5名が登壇しました。開催前の参加申込は307名（学会員66名、非会員98名、学生143名）ありました。当日参加したユーザー数（ウェビナーに入場するとカウントされる数）は322名で、同時ビューの最大数は230名でした。また、オンラインの特徴が生かされ、アメリカやケニアなどの日本国外からの視聴もありました。

19：00～19：40〈第一部 女子〉

講師：宮脇裕史 氏（KUROBE アクアフェアリーズ コーチ兼アナリスト）



講師の宮脇氏より、世界女子の戦術について「中国のグループ戦敗退」と「女子の男子化は本当に進んでいるのか」の2つのトピックを講演いただきました。前回大会（リオ五輪）王者で優勝候補の中国が5位で予選落ちをしたことについて、宮脇氏はミスが頻発したことや、世代交代が不十分であることを指摘しました。リオ五輪と東京五輪の両大会に出場した選手の数が7名と他国に比べ多く、若い主力の台頭が無かったことを具体的な数字を用いて示していただきました。質疑応答では「優勝したアメリカのプロリーグが発足したことは影響するか？」や「勝敗に影響を与えた具体的なミスについて」、「同じメンバーが多いのになぜミスが増えた」といった質問がありました。

女子の男子化は本当に進んでいるのかについて、宮脇氏は「ジャンプドライブサーブはまだ女子では少ない」、「ワンレグ攻撃を殺さないバックアタックが今後スタンダードになる」、「状況に合わせたブロックシステム」について言及しました。特にブロックシステムについて、宮脇氏は相手のパスの状況とデータによってブロックシステムを適宜変更していると述べていました。また議論の中で、ナビゲーターの濱田氏よりジャンプドライブサーブを打つような選手の状況や育成をすることも必要ではないかとの示唆がありました。

アナリストからみた  
オリンピック出場国の戦術

日本バレーボール学会  
2021バレーボールミーティング

2021/9/14 日本バレーボール学会 2021バレーボールミーティング 1

19：40～20：20〈第二部 男子〉

講師：石丸出穂氏（仙台大学）

初めに講師の石丸氏より、五輪における男子チームの身長について先行研究を用いて、「新戦術誕生時は低身長チームが勝っており、新戦術を高身長チームが模倣、凌駕する歴史が繰り返されている。」ことが報告されました。また、「今回の優勝した（参加チーム中上から7番目の身長であった）フラン

スはもしかしたら何かしら新しいことが起こったのじゃないか。皆さんと考えていきたいです。」と続けて述べられました。

これまでの戦術傾向と東京五輪の戦術傾向について「ショートサーブでフロントゾーンを狙う傾向、尚且つバックプレーヤーのアウトサイドヒッターがバックアタックの助走に入るのを潰すために狙い、それを防ぐためにミドルブロッカーがレセプションする機会が増えているのではないか」、「スロットをずらしたエアフェイク」、「オプションブロック（相手オフェンスデータに基づいた配置と反応）」、「ブロックの指先を狙ったブロックアウト」、「左利きのアウトサイドの起用」があげられました。ナビゲーターとのディスカッションの中で、ショートサーブが効果的になったのは、強力なジャンプドライブサーブによってレセプションがエンドラインまで下がったことによってではないかと議論がありました。また、視聴者の質問で、「サウスポーの選手をレフト側で起用するメリットは何か」とあり、石丸氏は「S1はどのチームも苦手とするが、サウスポーをアウトサイドヒッターとして起用することで、ローテーションを回すことができる」と推察していました。

続けて、石丸氏にはスタートローテーションについて、サーブ時とレセプション時の割合を示していただきました。特にフランス、日本、アメリカはさまざまなバリエーションを用いたことについて、石丸氏は「スタートローテーションがサーブ対レセプションによってローテーションを変えていたのではないか」と述べていました。さらに、ショートサーブによってアプローチを消す戦術や、日本がショートサーブに対応したフォーメーションを採用しているなど説明されました。

質問は「利き腕に依存しないポジション起用や選手のオールラウンダー化に伴い、フロントオーダーが流行る可能性はありますか」、「女子でS3で、OPがC1バックアタックに入らず、11 pickに入る（後衛OHが攻撃参加せず）、前衛MBがブロード、それが使われる理由はなんでしょうか？」などがありました。

アナリストからみた  
オリンピック出場国の戦術  
～男子編～

JVA情報戦略ユニット  
仙台大学体育学部  
スポーツ情報マスメディア学科  
准教授 石丸 出穂



最後に、板倉尚子氏（日本女子体育大学）からオリンピック選手村での活動と黒川貞生会長（明治学院大学）による閉会の挨拶で2021バレーボールミーティングが幕を閉じました。

オリンピックが終了して1週間後の開催にも関わらず、パネリストの宮脇氏と石丸氏には時間のない中、分析していただき感謝申し上げます。また、総合司会の縄田氏やナビゲーターの濱田氏、根本氏には円滑な進行と貴重なご意見をいただき有難うございました。そして、参加していただいた視聴者様から、44件ものたくさんのご質問をお寄せいただき、心より感謝申し上げます。有難うございました。



文責：沼田薫樹（鹿屋体育大学）